

史跡・名勝 嵐山

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一二―一

史跡・名勝 嵐山

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡・名勝 嵐山

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、京福電鉄嵐山駅構内リニューアル工事に伴う史跡・名勝 嵐山の遺構確認調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

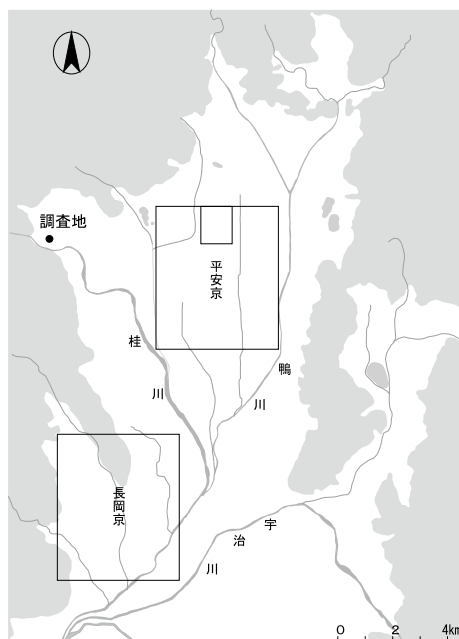
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成24年7月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡・名勝 嵐山
- 2 調査所在地 京都市右京区嵯峨天龍寺造路町
- 3 委 託 者 平安建設工業株式会社 代表取締役社長 井上準二
- 4 調査期間 2012年3月14日～2012年4月16日
- 5 調査面積 360㎡
- 6 調査担当者 東 洋一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「大覚寺」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 東 洋一
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 調査地の位置と環境	5
(1) 遺跡の環境	5
(2) 周辺の調査	7
3. 遺 構	10
4. 遺 物	17
(1) 遺物の概要	17
(2) 土器類	17
(3) 瓦埴類	19
5. まとめ	20

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区(東から)
		2	2区(西から)
図版2	遺構	1	3区(東から)
		2	4区(北東から)
図版3	遺構	1	5区(西から)
		2	6区(東から)
図版4	遺物	2区土坑22出土遺物	

挿 図 目 次

図1	調査地および周辺の調査位置図(1:2,500)	1
図2	調査区配置図(1:500)	2
図3	1区調査前風景(西から)	3
図4	3区調査前風景(西から)	3
図5	4区調査前風景(北東から)	3

図6	5区・6区調査前風景（西から）	3
図7	1区調査風景（西から）	3
図8	「臨川寺領大井郷界畔絵図」	4
図9	「亀山殿近辺屋敷地指図」	6
図10	1区実測図（1：100）	11
図11	2区実測図（1：100）	12
図12	土坑10・土坑22断面図（1：50）	13
図13	土坑10断面（南から）	13
図14	土坑22断面（東から）	13
図15	3区実測図（1：100）	13
図16	4区実測図（1：100）	14
図17	5区実測図（1：100）	15
図18	6区実測図（1：100）	16
図19	2区土坑22出土遺物実測図（1：4）	18
図20	臨川寺明治時代境内図	20
図21	臨川寺伽藍北限復元図（1：1,000）	21
図22	臨川寺庭園遺跡と道路計画	22

表 目 次

表1	臨川寺旧境内調査一覧表	7
表2	遺構概要表	10
表3	遺物概要表	17

史跡・名勝 嵐山

1. 調査経過

調査地は史跡・名勝嵐山指定地内に位置する。京福電鉄嵐山駅構内にリニューアル工事が計画されたため、2012年3月14日から4月16日まで京都府教育庁指導部文化財保護課・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導の下に遺構確認調査を実施した。また、調査地は「臨川寺境内」に含まれているので、中世の臨川寺関連の遺構検出が予測できた。調査区は駅構内北東に1区、中央プラットホーム内に5・6区、駅構内南側に2～4区の合計6箇所設けた。

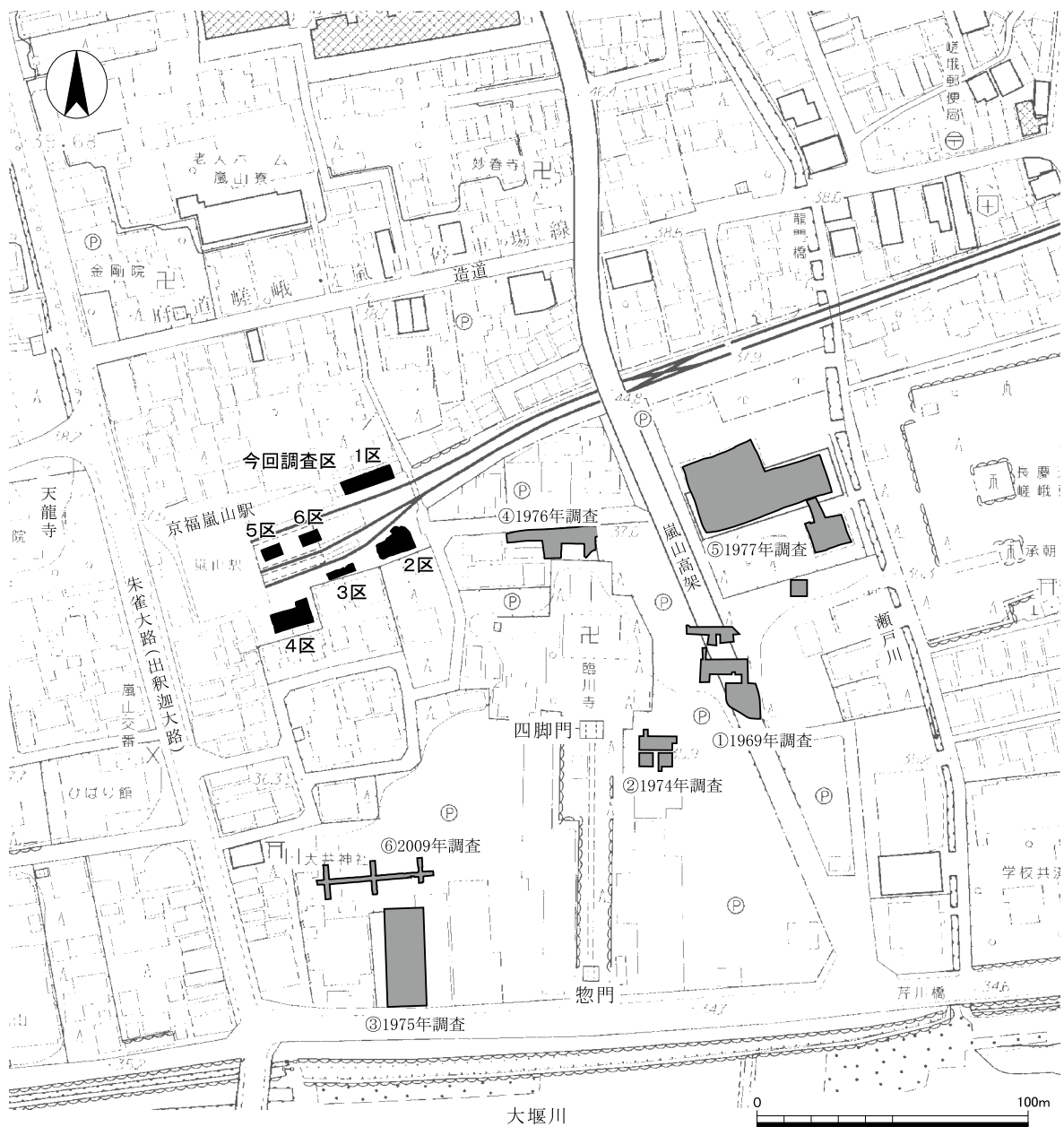


図1 調査地および周辺の調査位置図 (1 : 2,500)

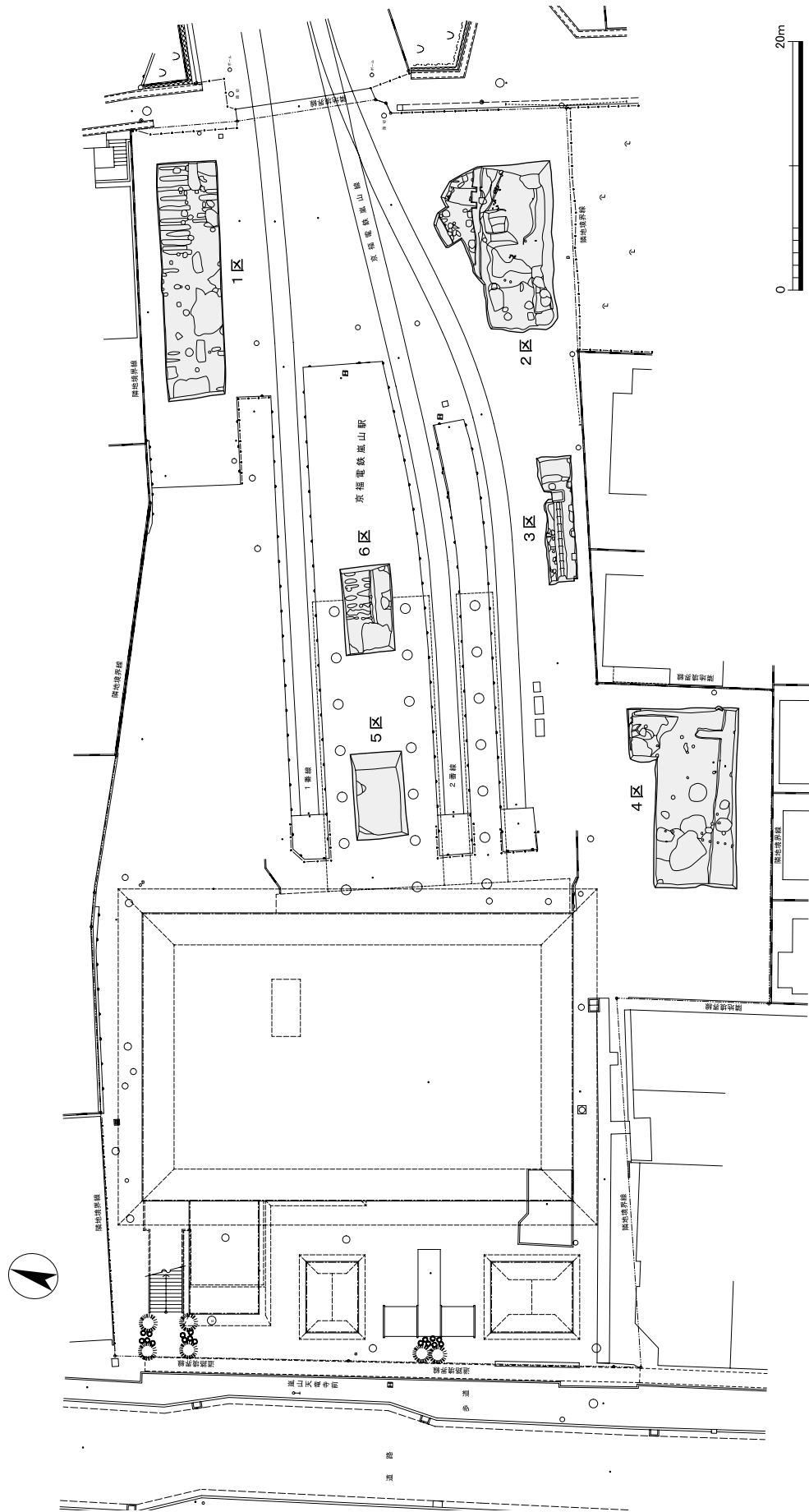


図2 調査区配置図 (1 : 500)



図3 1区調査前風景（西から）



図4 3区調査前風景（西から）



図5 4区調査前風景（北東から）



図6 5区・6区調査前風景（西から）

1区は、かつて愛宕神社への参詣路線として建設され戦後廃止となった旧愛宕山鉄道軌道跡であり、調査前には建物が建っていた地区である。5・6区は嵐山駅中央プラットホームの東西に設定した。中央プラットホームは南北に設置されていた旧プラットホーム間の軌道を埋めて、幅の広いプラットホームに改造されている。2区は嵐山駅構内南東に存在した焼却場であった場所である。3区は焼却場への狭い通路部分で、4区は駅南部の駐車スペースとして利用されているが、かつては、コンクリート基礎建物が建っていた場所である。

調査は近代から現代の盛土層・攪乱を重機で除去した。1区では、地山面までの堆積層は全て近・現代層で、近世を遡る包含層を確認しなかった。嵐山駅や軌道敷設時に平坦面を作るため地山まで削平した可能性が高いと思われた。しかし、遺構検出面となった地山面で幕末から近代に埋まった土坑2基を検出した。

2区では、中世に遡る土坑22と時期不明の土坑10を検出した。土坑22上層は攪乱を受けていたが、下層は中世の臨川寺関係と考えられる遺物を多く含んでいた。この土坑は東から南に直角に折れ曲がり、北壁肩と西壁肩が、調査区外の東と南に延長しているため、平面的な形状は不



図7 1区調査風景（西から）

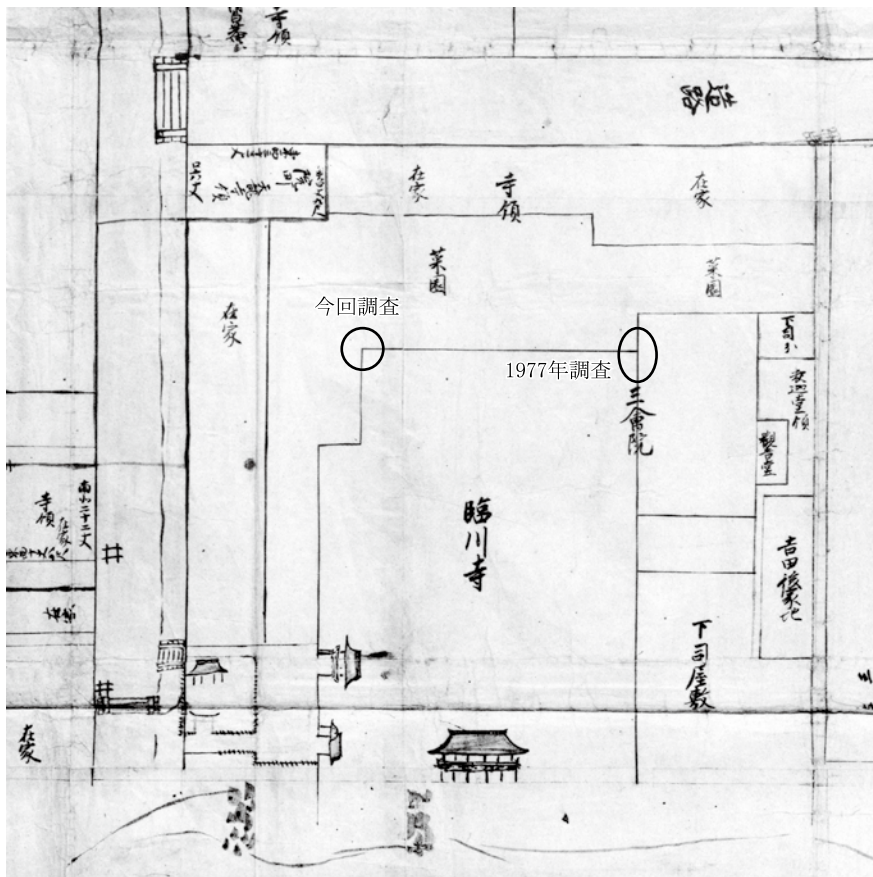


図8 「臨川寺領大井郷界畔絵図」
 (部分、天龍寺蔵、東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影二 近畿一』より複写)

明である。しかし、貞和三年(1347)作成「臨川寺領大井郷界畔絵図」(図8)に描かれた臨川寺伽藍北限を示す東西区画線の北西隅部に該当する可能性が高く、臨川寺伽藍を取り囲む「菜園」と明記された地区とを区画する溝ないし壕の可能性が出てきた¹⁾。土坑22と、これに接する土坑10については、重要遺構と判断し、遺構上面の保存処置を行って埋め戻した。

3～6区からは、近世以前に遡る遺構を検出しなかった。

註

- 1) 「二〇 山城国臨川寺領大井郷界畔絵図(分割4)」東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影二 近畿一』東京大学出版会、1992年。

2. 調査地の位置と環境

(1) 遺跡の環境 (図9)

嵯峨野における葛野郡条里一条・二条の地割は、真北から西に約16度振れている。この傾きは、北西から南東に低く傾斜する自然地形に制約されて特殊な条里地割になったと考えられている¹⁾。

今回の調査対象地である嵐山は、奈良時代より貴族・天皇の別業地として開発されたが、鎌倉時代中期の建長七年(1255)に後嵯峨上皇が、新院御所「亀山殿」を造営したことで飛躍的に発展した。しかし、それに先だつ建長五年(1253)八月二十八日に、調査地南の大堰川に面した「川端棧敷屋・大井川辺新造御所」に既に上皇が御幸しており、この御所も別宮として「亀山殿」に附属していた²⁾。

「亀山殿」はその後、亀山天皇・上皇の御所として機能し、孫の後醍醐天皇に伝領された。この大覚寺統ゆかりの「亀山殿」跡地に足利尊氏が、後醍醐天皇の怨霊を慰めるため、暦応四年(1339)に「霊亀山天龍寺」を造営して現代に至っている³⁾。

今回の調査地に含まれる「霊亀山臨川寺」は、西隣する同じ山号の「霊亀山天龍寺」より創建が早く、亀山殿の「川端棧敷屋・大井川辺新造御所」跡を伝領した後醍醐天皇の第二王子である世良親王が、この地を禅寺にしたいとの遺命を残して亡くなったことに始まる。この遺命を受けた後醍醐天皇が元徳二年(1330)十月二十五日に禅寺に改める綸旨を発したが、元弘の乱(1331)によって後醍醐自身が京都を離れ、混乱の中しばらく沙汰止みとなっていた。しかし、鎌倉幕府崩壊後、急遽帰京した後醍醐の元弘三年(1333)七月二十三日付け綸旨よって、夢窓国師を開山とする臨川寺伽藍が建立されることとなった⁴⁾。

現在の臨川寺北半の境内は、「川端殿御所」の北側に存在した敷地であり、臨川寺創建時には二階堂道蘊の「臨川寺北道蘊屋地所」であった。この敷地は建武二年(1335)正月二十五日に後醍醐の綸旨によって、臨川寺に施入された⁵⁾。

現在、臨川寺東側に沿って南流する瀬戸川は古くは「芹川」と呼ばれており、「亀山殿近辺屋敷地指図」にあるように、「芹川」は創建以前には川端殿御所北東隅で西に曲がり、川端殿北側に沿って西流し、川端殿西の「芹川殿」東端で南に方向を変えて、大堰川に注いでいた(図9)。しかし、「臨川寺北道蘊屋地所」が臨川寺領となった建武二年に芹川の流れを臨川寺東側に付け替えて倍の伽藍域を確保したことが図8で判明する。夢窓は新たに加わった臨川寺境内に本尊弥勒菩薩を中央に挟んで、左右に故世良親王と夢窓自身の寿塔を配した「昭堂」を建立し、自らの臨川寺開山塔頭「三会院」とした⁶⁾。建武三年(1336)九月二十七日には北朝の光厳上皇から「諸山随一」とする院宣が下るが、「三会院」を建立することによって、勅願寺であり且つ幕府の「五山十刹」に入る官寺として相応しい禅宗伽藍が整備された⁷⁾。

臨川寺は応仁乱によって応仁二年(1468)に天龍寺共々全焼したが、乱以前にも康安元年(1361)と永和四年(1378)の火災があり、その都度再建を果たしている。応仁乱の12年後の文明

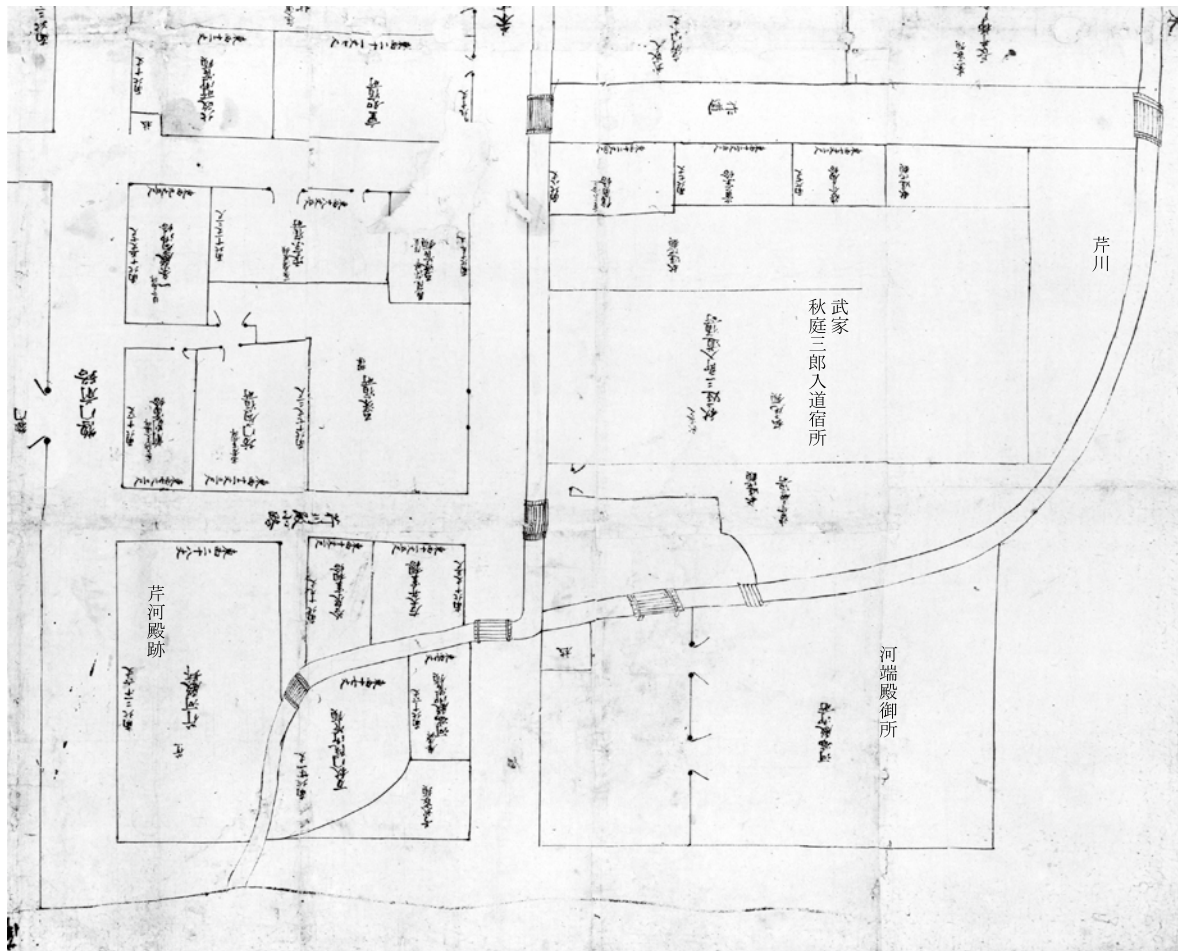


図9 「亀山殿近辺屋敷地指図」
 (部分、天龍寺蔵、東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影二 近畿一』より複写)

十二年（1480）九月七日には再建が進み、文明十七年（1485）には将軍足利義政の御成があり、「臨川寺大山門（惣門）・三会院山門・東西廊・昭堂・方丈・客殿」等が再建されていた⁸⁾。しかし、明応五年（1496）から永正元年（1504）間に「仏殿・衣鉢閣・山門」、天文十九年（1550）九月に「雲居庵・昭堂」が造営されたことを記す記録が残されており、史料を欠くが義政御成のあった文明十七年から明応五年にかけて倒壊もしくは火災に遭遇している可能性が高い。この明応以降に再建された伽藍を描いたと考えられている近世初頭の上杉本「洛中洛外図」には、臨川寺境内に「法堂」を含む立派な伽藍建物を描いている⁹⁾。

しかし、これらの建物も文禄五年（1596）七月晦日の台風によって倒壊したことが、記録に残っている。その後、慶長十三年（1608）に方丈が、元和五年（1619）書院が、元和八年（1622）に三会院昭堂が、正保四年（1647）に三会院中門が、再建され現代に至っている¹⁰⁾。

天明七年（1787）刊の「拾遺都名所図絵」に境内北の三会院「開山堂」と境内東側「夢窓作庭」と書く庭園を中心に林・藪等が鬱蒼と茂る景観を描いている。しかし、明治四年（1871）の土地令によって、伽藍周囲の藪・林は官に没収された¹¹⁾。

(2) 周辺の調査（図1、表1）

臨川寺旧境内は今回の調査を含めて7回の調査を行っている。多くは明治時代初頭に土地処分された部分に該当するが、「嵐山高架道」建設のため戦後、市に譲渡された臨川寺北東部の「三會院」庭園部分も含まれている。また、1976年の調査では正方位の建物跡を検出している。ここでは今日までの臨川寺境内の発掘調査について概観する。なお、1969年に検出した「三會院」庭園の発掘調査位置を1977年調査の「発掘調査報告書」で異なった位置に落としているので図1において訂正しておく。

①1969年に臨川寺旧境内東部に位置する「三會院」庭園跡に南北を貫通する嵐山高架道が新設されることになり、橋脚部の発掘調査が行われた。天明七年（1787）刊の「拾遺都名所図絵」に描かれた園池と類似する池跡や護岸の石組・庭石の一部が検出された。その他、園路や北東部で築山に推定できる遺構を検出している。出土遺物は13世紀から18世紀にかけての遺物が検出されており、江戸時代に一度手加えられた可能性がある。

②1974年に嵐山美術館建設に際して行われた。やや西に振れる幅約3m、深さ0.80mの南北溝と、その溝に繋がるほぼ正方位の東西溝が検出された。溝からは南北朝期を降らない遺物が多量に出土した。その他、石列・ピット群などが検出された。

③1975年には臨川寺旧境内南西部の嵐山食堂改築に伴う調査が行われ、臨川寺関係と考えられた石組みの溝が4本検出された。

④1976年には臨川寺三會院本堂裏の宅地開発に伴う調査で、現存する本堂と方位が同一で北軸に沿った南北方向に長い礎石建物跡が検出された。床に漆喰が塗られていたが、火災のため赤く変色していた。出土遺物は多量の輸入・国産の天目茶碗・輸入陶磁器などが出土している。罹災した時期は不明であるが、出土瓦から南北朝期の臨川寺創建期の建物とされている。

⑤1977年には臨川寺旧境内の北東部に該当する瀬戸川と嵐山高架道間で調査が行われた。平安

表1 臨川寺旧境内調査一覧表

No	調査年	調査機関	文 献
①	1969年	京都市	牛川善幸「臨川寺庭園遺跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報1970』奈良国立文化財研究所、1970年。吉川 需「高架道路の建設と臨川寺庭園遺跡の保存」『月刊文化財 82号』第一法規出版株式会社、1970年。
②	1974年	臨川寺庭園遺跡発掘調査団	江谷 寛『臨川寺庭園遺跡発掘調査概要』1975年。江谷 寛「臨川寺旧境内」『仏教芸術115号』毎日新聞社、1977年。
③	1975年	江谷 寛	江谷 寛「臨川寺旧境内」『仏教芸術115号』毎日新聞社、1977年。
④	1976年	江谷 寛	江谷 寛「臨川寺旧境内」『仏教芸術115号』毎日新聞社、1977年。
⑤	1977年	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	吉川義彦・中村 敦・石井 望『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅳ、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1978年。
⑥	2009年	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	遺構確認調査のため報告書は刊行していない。

時代前期から江戸時代後半以降の遺構・遺物を検出している。特筆すべき遺構として主軸が西に傾く調査区西壁に沿って長さ約22mの北端で直角に途切れる溝状遺構SX01を検出している。ただし、溝状遺構西肩が調査区外となるため幅は不明である。

⑥2009年に③の調査地点の北側で小規模な遺構確認調査を行った。中世の包含層と攪乱断面から平安時代前期の土師器皿を含む溝状遺構を検出し、中世包含層の下に砂礫層を確認した。遺構を確認したのでそのまま埋め戻した。

註

- 1) 金田章裕『条里と村落の歴史と理学的研究』大明堂。西山良平「山城 山城国葛野郡班田図」『日本古代荘園図』東京大学出版会、1996年所収。山田邦和「中世都市嵯峨の変遷」『平安京－京都』京都大学学術出版会、2007年。
- 2) 大村拓生「中世嵯峨の都市的発展と大堰川交通」『都市文化研究3』2004年所収。「経光記」『図書寮叢書・仙洞移徙部類記・下』明治書院、1991年所収。
- 3) 後醍醐天皇と大覚寺統所領については、百瀬明治「天龍寺の歴史」(『天龍寺』東洋文化社、1978年所収)、寺尾宏二『後醍醐天皇と天龍寺』(後醍醐天皇多宝殿再建委員会、1934年)参照。
- 4) 後醍醐天皇の論旨は、近年発刊された『天龍寺文書の研究』(思文閣出版、2011年)に年代順に収録されている。以下に挙げる「臨川寺文書」は同書による。
- 5) この論旨は夢窓宛に「臨川寺北道蘊被寄附当寺也」(「臨川寺文書」とある。「臨川寺北道蘊屋地所」は、「武家人 秋庭三郎入道 宿地 松尾領」であった。元弘の乱を契機に二階堂道蘊が兵を引き連れて入洛しているため、その間に入れ替わった可能性が高い。
- 6) 夢窓が暦応二年(1339)に定めた『臨川家訓』に「寺後、奉安報恩之塔、其傍又構卵塔以表開山之儀、中立弥勒堂、充両塔之昭堂、因号三会院」とある。『臨川家訓』は『夢窓国師語録』(大本山天龍寺、1989年)より引用。
- 7) 院宜には「靈龜山臨川寺 右当寺者、臨川之勝概也、臨濟之正派、斯通西郊之靈場也、西祖宗風可振、宜為諸山之随一」(「臨川寺文書」とある。
- 8) 一度目の火災は夢窓の弟子、春屋妙芭の業績を辿った「普明国師行業実録」(『続群書類従第九集下』続群書類従完成会、1925年所収)に「康安元年辛丑冬十月 臨川寺為丙丁所崇」とあり、火災があったこの年に臨川寺住持となった妙芭の下で「仏殿・山門・方丈」が再建されたことを記す。二度目は「花管三代記」(『群書類従第二十六集』続群書類従完成会、1932年所収)に「永和四年十一月卅日。夜半臨川寺廻禄」とある。応仁の乱の三度目の火災は江戸時代に藤原紀光によって編纂された「続史愚抄」土御門御門 応仁二年九月七日甲子の条(『国史大系十四卷』吉川弘文館、1931年所収)に「天龍寺臨川寺等火」とある。文明十二年(1480)九月七日条に中御門宣胤が「昨日人数令同道帰京、嵯峨乱後始而一見、諸寺諸院以下悉以焼失、荒野也、天龍寺臨川寺等、如形取立者也」(「宣胤卿記」(『増補史料大成四十四卷』吉川弘文館、1931年所収)としており再建が進んでいたことを示す。確実に再建されたことを伝える「蔭涼軒日録」文明十七年(1485)六月十四日条(『蔭涼軒日録二』史籍刊行会、1954年所収)には「仏殿」が見えない。以上の臨川寺造営・火災の記録は吉川義彦・中村 敦・石井望『臨川寺旧境内発掘調査報告』1978年、『京都市の文化財 京都市指定・登録文化財第八集』(京都市文化観光局、1992年)にあるが、それ以降には漏れている部分があるので以下で補う。

- 9) 明応五年から大永五年にかけて作成された国文学研究資料館蔵『旧臨川寺文書』を分析した今谷明氏は『京都・一五四七年』(平凡社、1988年)で、上杉本『洛中洛外図』に描かれている「山門・仏殿・法堂」が、その時再建されたと記述しているが、掲載した造営表(78p)に「法堂」はない。また、その造営文書を収録した「臨川寺文書」の『明応五年六月、臨川寺仏殿并衣鉢閣造営納下帳』と『明応七年正月十一日、臨川寺山門再興造営帳』から『天文十九年九月、雲居庵昭堂造営帳』までの、修理と見られる『造営帳』中にも見当たらない。むしろ、開山当初から夢窓によって「法堂不要構之」とされ、「仏殿」の「臨川寺本尊」も「釈迦三尊畫像」であったことから、南北距離が短い伽藍郭内には法堂を建てる空間はなかったのではなかろうか。因みに、他の『洛中洛外図』には山門・仏殿だけが描かれている例が多い。なお、中世臨川寺領内には、図8に書かれた臨川寺領内にある「在家」と書かれた区画に土倉・酒屋が点在していることが明らかにされており、莊園領主としての側面の外に幕府から保護された臨川寺の対外貿易・坐公文収入・祠堂銭等の資金運用や徳政一揆との関連も注目されている。中世における臨川寺の度重なる再建もこのような関係が背景にあったものと考えられる。臨川寺・天龍寺を中心とした中世嵯峨の都市化をめぐることは、伊藤 毅「中世寺院と寺院」(『日本都市史入門Ⅰ』東京大学出版会、1986年所収)、原田正俊「中世の嵯峨と天龍寺」(『講座蓮如・第四卷』平凡社、1997年所収)、大村拓生「中世嵯峨の都市的發展と大堰川交通」(『都市文化研究3』2004年所収)、山田邦和『日本中世の首都と王権都市』(文理閣、2012年)等が論究している。
- 10) 欠落のため倒壊日を確定できないが「鹿苑日録」文禄五年七月晦日条(『鹿苑日録第三卷』続群書類従完成会、1935年所収)に「影堂倒矣。臨川寺亦同前。天龍寺諸堂・方丈同前。雲居亦同。諸院相残分妙知・慈濟迄之由也。鹿王院昭堂崩云々。可嘆時哉」とある。その後の臨川寺造営記録に『自慶長九辰至慶安四卯寺院造営諸牒十三冊』(国文学資料博物館蔵)があり、現存の三會院本堂・客殿・三會院中門塔の建物が江戸時代初頭に新たに再建されたことが判明している。川上 貢『禅院の建築〔新訂〕』(中央公論美術出版、2005年)参照。なお、近世初頭に再建された「方丈」は元治元年(1864)の兵乱で全焼した天龍寺へ慶応二年(1866)に移築された旨が寺尾宏二『後醍醐天皇と天龍寺』(前掲書)で述べられている。
- 11) 「京都府寺誌稿 45 臨川寺」(京都府立総合資料館蔵)

3. 遺 構

調査地は「臨川寺領大井郷岬絵図」（図8）によれば、2区を除いて臨川寺領内北東の「菜園」とされている部分に該当する。基本層序は場所によって異なるが、地山まで近代以降の盛土層である。地山は褐色から暗褐色の粘質土が主体であるが、4区北東部の一部には流水性の極粗砂～礫層が存在した。

1区（図版1、図10）

嵐山駅構内北東に設けた1区では、東半部で地山面に2～4cmほど食い込んだ愛宕山鉄道時代の枕木跡を北東部で検出した。枕木長さは約2.4m、幅0.4mが平均である¹⁾。多くの柱穴状の穴を検出したが、これらの多くが枕木跡の上から掘り込まれており、ガラス・化学繊維などが検出されたので近代以降の鉄道関係の穴と判断した。嵐山駅北側は地形が高くなっており、包含層・遺構などは鉄道敷設の平坦面にするために削平されたものと考えられる。

1区南東隅で検出した土坑28は埋土に棧瓦や幕末以降の陶磁器類を含む幕末以降から近代にかけての方形の遺構である。愛宕山鉄道嵐山駅が昭和四年（1929）に開業しており、開業以前に埋められた土坑であろう。また、調査区中央南端で検出した土坑27は埋土が無遺物で時代判定が難しいが、土坑28との関係から、ほぼ同時期の土坑と考えられる。これらの土坑は井戸の可能性もあるが、地表下95cm以下は保存されるため、確認していない。

2区（図版1、図11～14）

2区では中世の土坑22を検出した。この土坑は黄色から暗褐色系の地山粘質土を掘り込んで成立しており、黒褐色系の泥砂が堆積していた。東西7m以上、南北5m以上の大規模な土坑である。検出した土坑の輪郭は北西隅から扇状に南方と東方に延長し、延長部が調査区外となるので平面的な形状は不明である。北肩ラインは延長方向が北上がり、西肩ラインは真北よりやや西に傾いている。土坑上部は約1mの深さで近現代に攪乱されていた。下層は少なくとも8層に分層でき、中世の遺物だけが入る堆積層となっている。埋土中には炭の薄層があり、直上で完形の土師器などを検出している。攪乱11などの攪乱断面で肩部から-1.8mが土坑底であることを確認した。また、土坑底は平坦で水が流れていた痕跡はないが、南東隅の攪乱坑東断面では土坑底が南に向かって0.2m程上がるので溝になる可能性がある。北側の掘肩断面はほぼ垂直に掘り下げられているが、西側肩については、攪乱坑で壊され不明である。しかし、土坑が南に延長していることか

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
中 世	2区土坑22	
幕末以降	1区土坑27・28	
時期不明	2区土坑10	中世の土師器1片出土

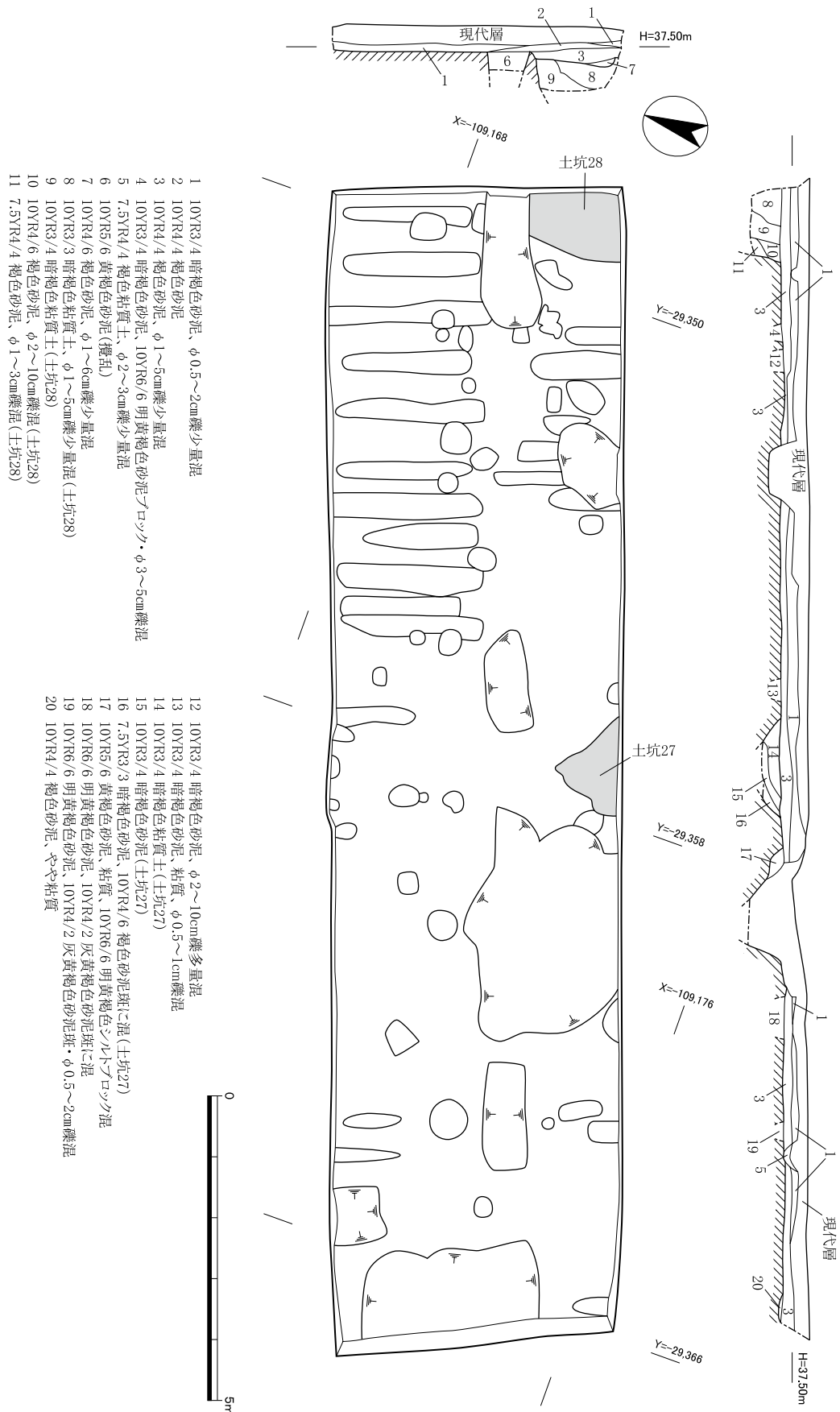
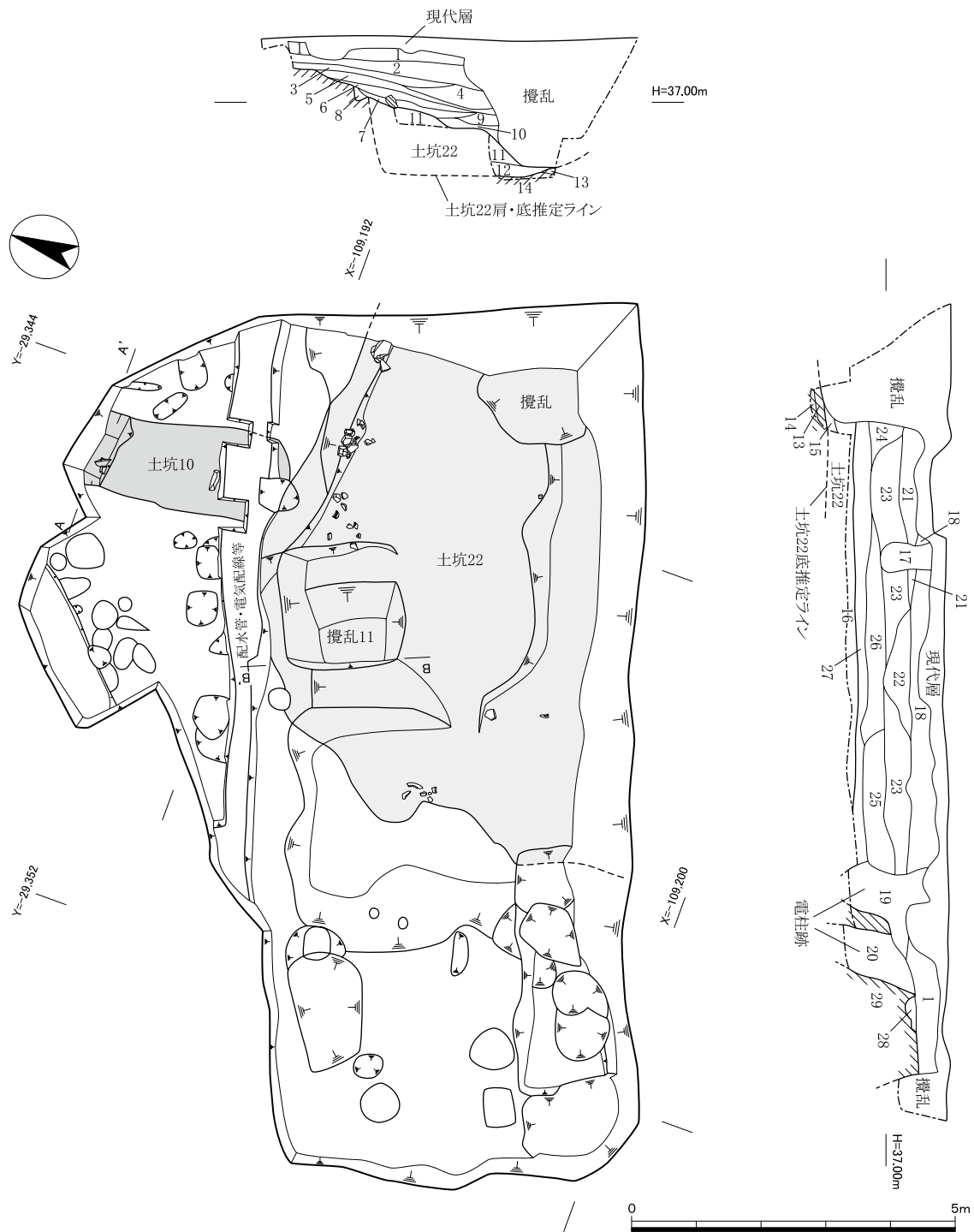


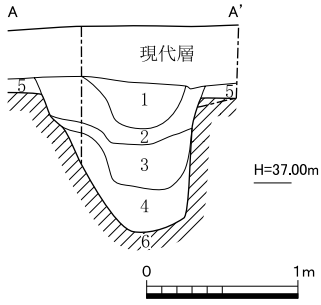
図10 1区遺構実測図(1:100)



- | | |
|--------------------------------------|--|
| 1 7.5YR3/3 暗褐色砂泥 | 16 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 |
| 2 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 | 17 7.5YR3/3 暗褐色砂泥、 ϕ 1~4cm礫微量混 |
| 3 7.5YR3/4 暗褐色砂泥、10YR6/6 明黄褐色砂泥ブロック混 | 18 10YR3/3 暗褐色砂泥、 ϕ 0.5~1cm礫少量混 |
| 4 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 19 10YR2/3 黒褐色砂泥 |
| 5 10YR3/3 暗褐色砂泥、10YR3/4 暗褐色砂泥ブロック混 | 20 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 6 7.5YR4/3 褐色砂泥 | 21 7.5YR3/2 黒褐色砂泥、10YR6/6 明黄褐色砂泥ブロック・ ϕ 1~2cm礫少量混 |
| 7 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 22 7.5YR3/4 暗褐色砂泥、 ϕ 0.5~8cm礫混 |
| 8 7.5YR4/4 褐色砂泥(根跡) | 23 10YR3/4 暗褐色砂泥、 ϕ 0.5~5cm礫混 |
| 9 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 24 7.5YR2/3 極暗褐色砂泥 |
| 10 10YR2/3 黒褐色砂泥 | 25 10YR2/3 黒褐色砂泥、 ϕ 1~10cm礫混 |
| 11 10YR2/2 黒褐色砂泥 | 26 7.5YR3/4 暗褐色砂泥、 ϕ 2~5cm礫混 |
| 12 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 27 10YR3/3 暗褐色砂泥 |
| 13 10YR3/4 暗褐色粘質土 | 28 10YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 14 10YR3/3 暗褐色粘質土(地山) | 29 7.5YR4/3 褐色粘質土 |
| 15 7.5YR3/3 暗褐色砂泥(地山) | |

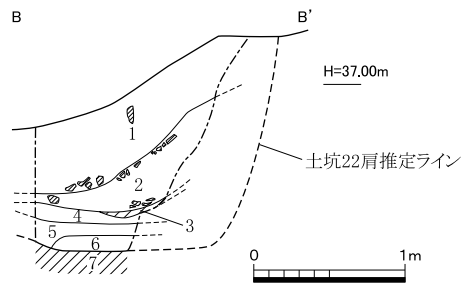
図11 2区遺構実測図(1:100)

土坑10



- 1 7.5YR4/4 褐色砂泥
- 2 7.5YR4/3 褐色砂泥
- 3 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 4 10YR2/2 黒褐色砂泥
- 5 10YR2/3 黒褐色砂泥
- 6 10YR4/6 褐色粘質土(地山)

土坑22



- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 2 10YR4/4 褐色砂泥、φ2~10cm礫混
- 3 10YR3/4 暗褐色砂泥、炭層
- 4 7.5YR4/6 褐色砂泥、粘質
- 5 7.5YR4/4 褐色砂泥、粘質
- 6 10YR3/4 暗褐色砂泥、φ1~3cm礫混
- 7 10YR4/6 褐色粘質土(地山)

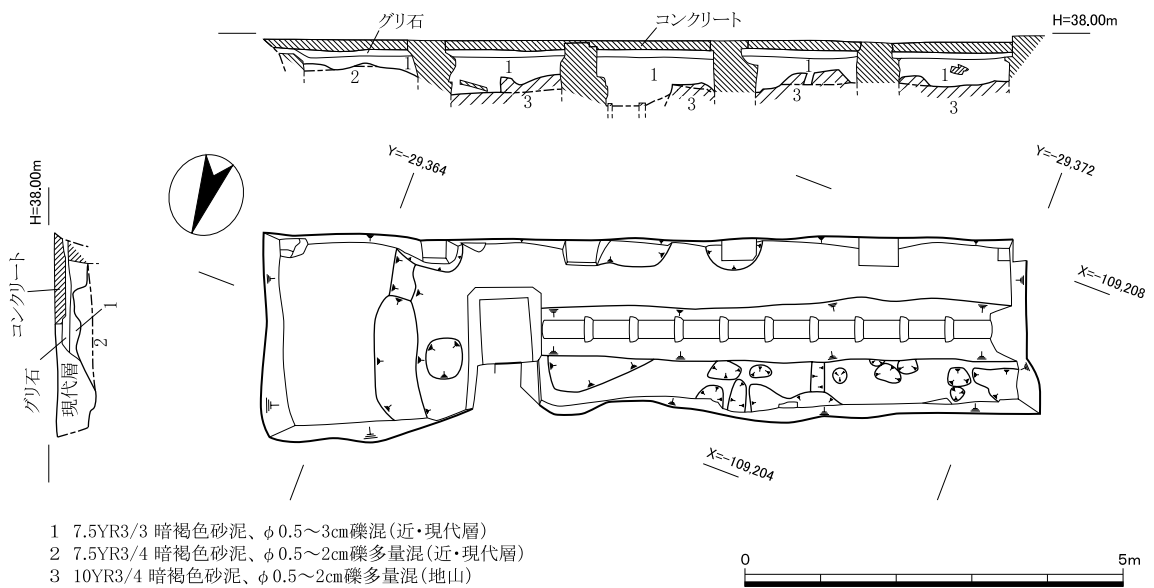
図12 土坑10・土坑22断面図 (1 : 50)



図13 土坑10断面 (南から)

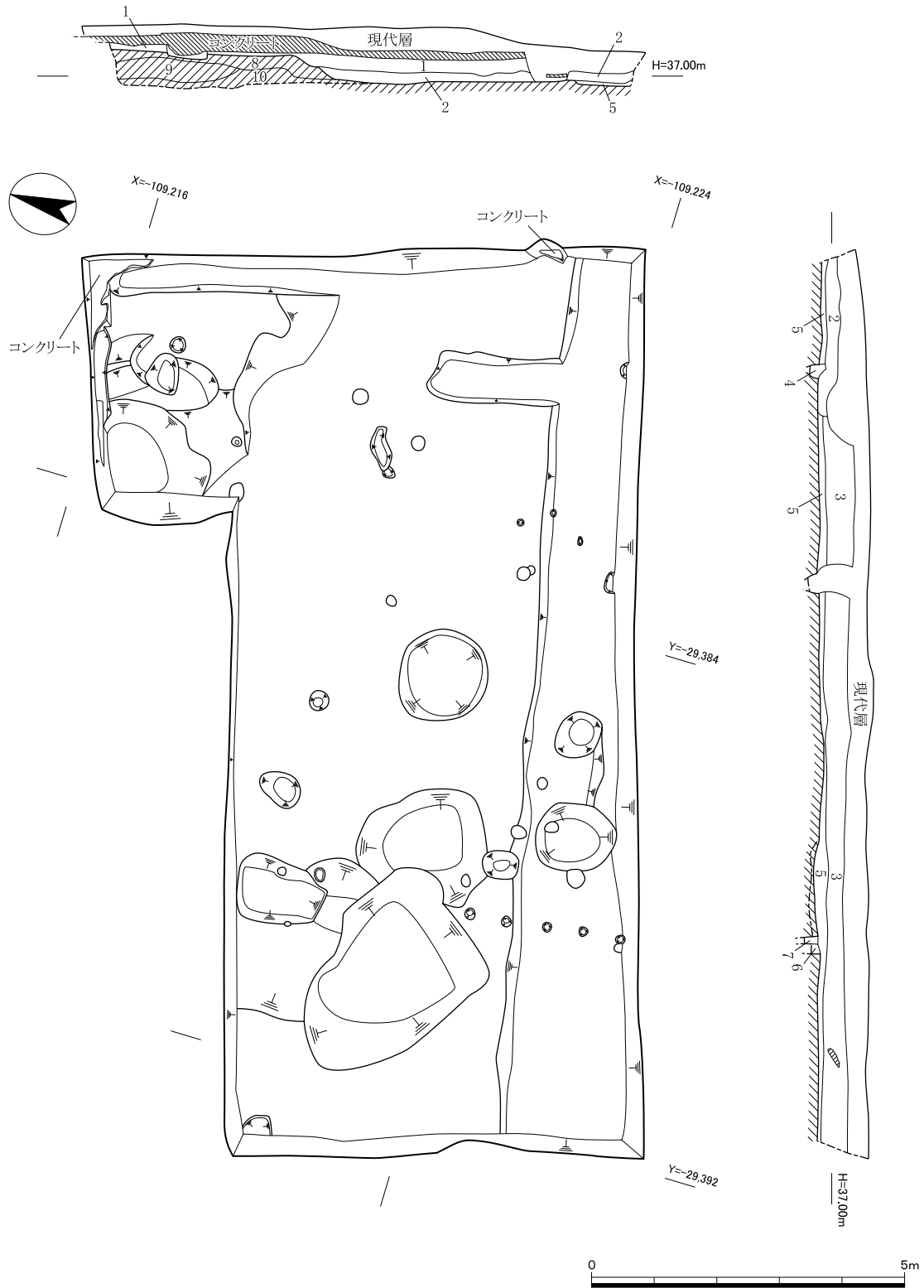


図14 土坑22断面 (東から)



- 1 7.5YR3/3 暗褐色砂泥、φ0.5~3cm礫混(近・現代層)
- 2 7.5YR3/4 暗褐色砂泥、φ0.5~2cm礫多量混(近・現代層)
- 3 10YR3/4 暗褐色砂泥、φ0.5~2cm礫多量混(地山)

図15 3区遺構実測図 (1 : 100)



- | | |
|-----------------------------|--------------------------|
| 1 7.5YR3/3 暗褐色砂泥、φ0.5~2cm礫混 | 6 5YR3/3 暗赤褐色砂泥、やや粘質 |
| 2 7.5YR4/3 褐色砂泥 | 7 5YR2/4 極暗赤褐色砂泥、やや粘質 |
| 3 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ1~10cm礫少量混 | 8 7.5YR4/4 褐色砂礫、φ0.5~8cm |
| 4 7.5YR3/2 黒褐色砂泥、やや粘質 | 9 10YR4/4 褐色砂礫、φ0.5~5cm |
| 5 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 10 7.5YR3/4 暗褐色砂泥、粘質 |

図16 4区遺構実測図 (1 : 100)

ら、L字状に折れ曲がる溝である可能性がある。土坑22の中世埋土は一部を除いて、基本的に掘り下げずに地中に保存した。

また、土坑22の北側で、幅1m、長さ3mの南北に長い土坑10を検出した。土坑は調査区外北に延長する。北壁脇を断ち割ったところ深さは約1mであるが、南端は浅くなっており土坑22と接する部分で消滅していた。水の流れた痕跡がなく、土坑22と類似した砂泥層が堆積していた。埋土から中世の土師器1点が出土したが、時代や遺構の性格の解明には至らなかった。

土坑10の北西部に拡張区を設けて遺構の有無を確認したが、現在の植栽などにより攪乱されており、遺構は検出されなかった。

3区 (図版2、図15)

3区では調査区中央に土管が埋設されており、近世以前の遺構は検出されなかった。

4区 (図版2、図16)

4区では3段の平坦な粘質土からなる地山面を検出したが、近世以前の遺構は検出されなかった。北東部で礫層を検出したが、断割によって自然堆積であることを確認した。

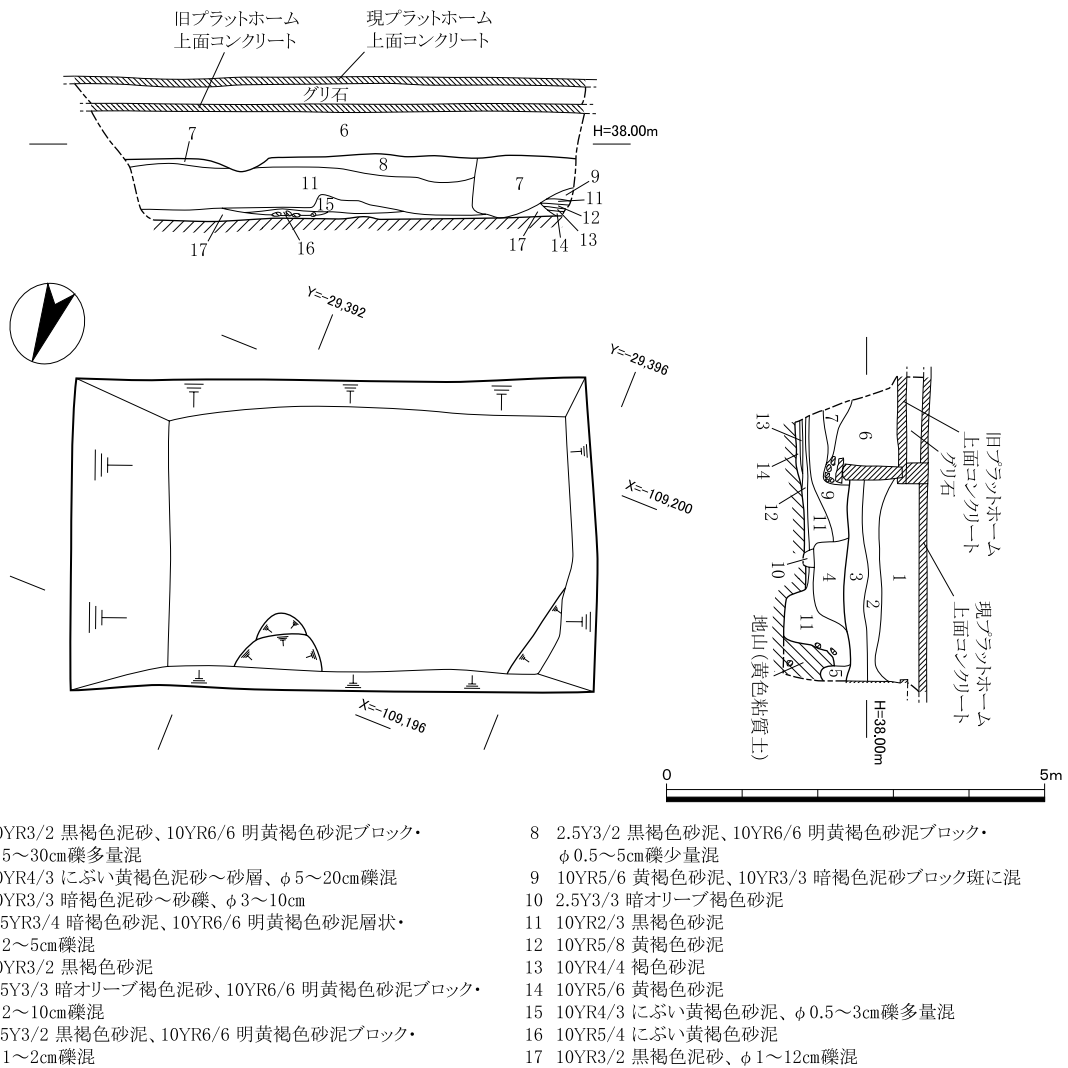


図17 5区遺構実測図 (1:100)

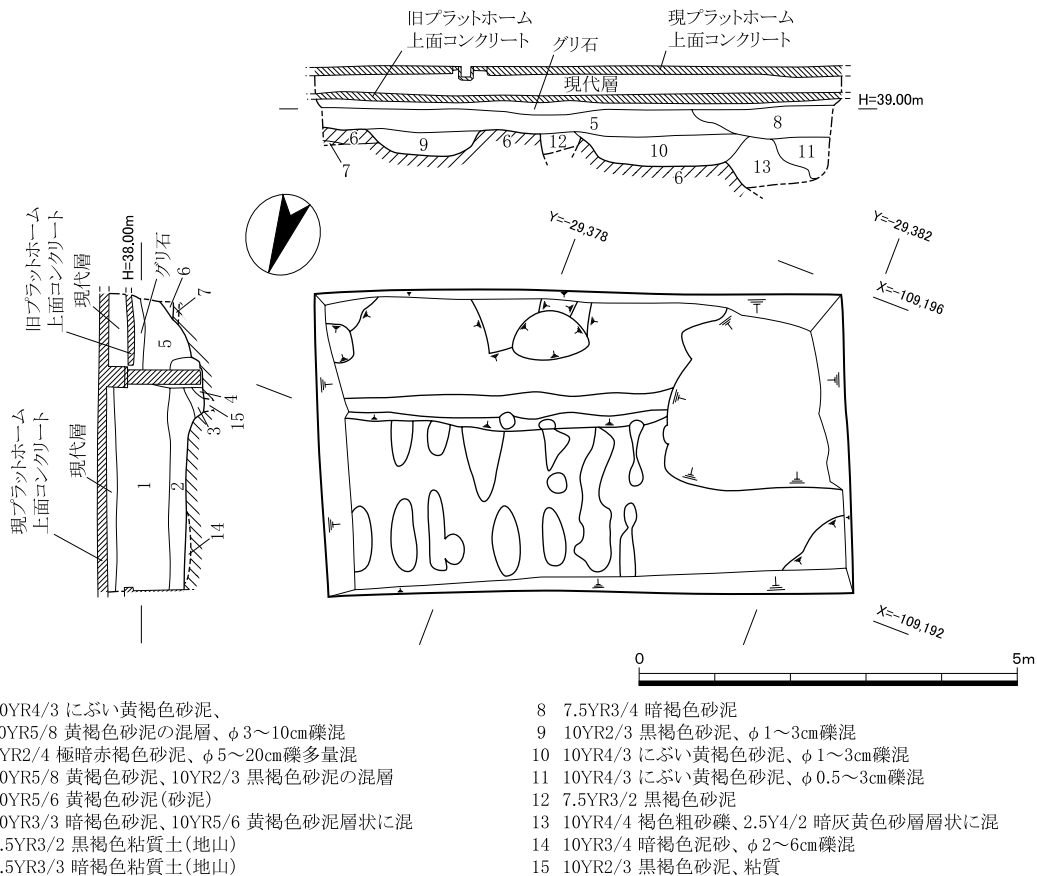


図18 6区遺構実測図(1:100)

5区・6区(図版3、図17・18)

5区と6区は現嵐電中央ホームの中央に設けた調査区である。5区ではプラットホーム上面から-1.9m、6区ではプラットホーム上面から-1.2mで地山面を検出したが、近代以前の遺構は検出されなかった。

5区と6区を設けたプラットホーム中央には、嘗ては1本の車道が敷設されていたが、この車道を埋めて現在の幅の広いプラットホームに改修された。この車道跡から、長さ1本分の枕木跡を検出している。東側の6区では枕木跡を地山面で検出したが、6区西南部および5区では、枕木跡を検出した面より0.4m掘り下げられており、近代の埋土が堆積していた。

5・6区の調査区北端と南半で、明治43年(1910)開業時と考えられる嵐山駅旧プラットホーム2列とその間に敷設された軌道跡を検出した。旧プラットホームの軌道間は2.7mある。また、現在のプラットホームより0.3m低い。南側の旧プラットホーム内側となる5区南側の地山は、軌道となる地山面より0.3m盛り上がり、軌道となる部分だけを掘り下げている。このことにより、旧プラットホーム敷設時に、近世以前の地層が大きく削平を受けていることが判明した。

註

- 1) 今回検出した愛宕山鉄道嵐山駅の歴史については、美濃功二「愛宕山鉄道略歴」(『鉄道史料 55号~66号』鉄道史料保存会、1989~1992年所収)が詳しく嵐山駅の設計図や写真が多数掲載されている。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土遺物は全て2区から出土した。2区土坑22の埋土から中世臨川寺を特徴付ける輸入陶磁器(天目茶碗・龍泉窯青磁碗)・播鉢・鬼瓦・埴・瓦質土器などが出土した。また、埋土下層からは完形の土師器へそ皿3点と底を穿孔した土師器皿1点が出土した。この下層の遺物は15世紀半ば(Ⅸ期中)に比定できることから、臨川寺伽藍が焼亡する応仁乱前後に下層が埋まったと考えられる。土坑10からは中世の土師器皿小片1片が出土した。

なお、混入遺物であるが、平安時代前期の猿投窯灰釉陶器碗片や須恵器甕片が出土しており、既に平安時代前期に当地が開発されていたことを示すものであろう。

(2) 土器類(図19、図版4)

土師器(1~4) 1~4は土坑22内の炭層(図12)直上から出土した。1~3は土師器のへそ皿で口径6.8~7.6cm、高さ1.4~1.85cmである。色調は淡い白橙色である。1は2・3に比べて小振りである。4は口径12.4cm、高さ3.3cmを測る土師器皿である。底からの立ち上がり部が薄く、端部がやや外反している。色調は淡い白橙色であるが1~3に比べて橙色が強い。皿底部中心には径0.4cmの焼成後の穿孔がある。

陶磁器(5~9) 5は龍泉窯系青磁碗である。見込中央釉下にスタンプ文があるが、文様は不明である。胎土はやや荒く灰白色で、釉は灰緑色である。高台底外側端面に面取りを施す。高台脇までのケズリは深い、高台内のケズリは浅いので底部が厚くなっている。腰部を外側水平に伸ばした後、体部を立ち上げている。内面の擦過痕が顕著である。15~16世紀の青磁碗である。

6は輸入天目茶碗と考えている。口径11.0cmで、高さは高台部を欠落しているが残存高5.5cmである。胴部はロート状に広がり口縁部を立ち上げる。見込に茶溜まりを一段低く作る。高台脇を水平に削り出すが、復元した高台径は3cmで狭く、背の低い天目に分類できる。腰部を厚く作っているのが特徴である。胎土は灰白色で焼成は良好である。胎土内には小さな黒い粒子もしくは黒班が

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期	灰釉陶器、須恵器		灰釉陶器1点		
中世	土師器、輸入陶磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦質土器、瓦、埴		土師器4点、輸入陶磁器2点、施釉陶器1点、焼締陶器1点、瓦質土器2点、瓦2点、埴1点		
合計		5箱	14点(1箱)	4箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

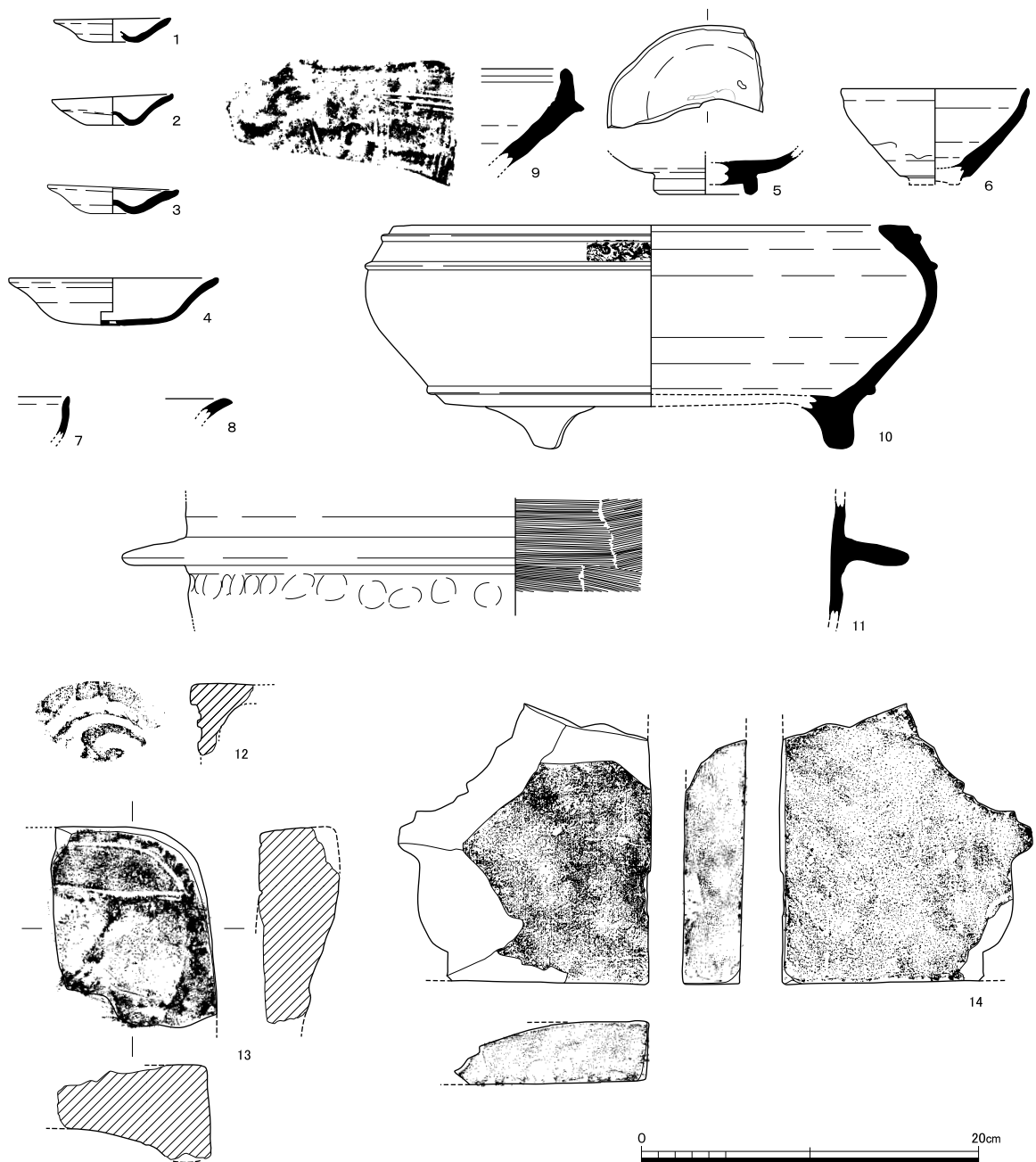


図19 2区土坑22出土遺物実測図（1：4）

多く認められる。露胎部は肌色に変化しており、磨いたように滑らかである。使用痕の可能性がある。釉は光沢のない暗褐色の釉を内面と外面腰部まで掛けた上から、内面と外面胴部に光沢のある茶褐色の釉を2度掛けして、細かい禾目状天目に仕上げている。また、口縁端部の口周りには2度掛けの痕跡はなく、光沢のない茶褐色を呈している。

7は端部のみで確言はできないが、瀬戸・美濃系天目茶碗の口縁部の可能性がある。6より器厚が薄い。胎土は密であるが、6にある黒い粒子状の斑点が極端に少ない。釉は全面光沢のある茶褐色である。

8は大振りの灰釉陶器碗の端部の可能性が高い。端部は大きく外反し先端が尖っている。内面のみ釉を施す。推定口径は20cmを越える。外面横方向に0.2cmの横方向のミガキを認めた。緑釉陶器

用の素地を灰釉に転用した可能性がある。平安時代前期（I期新）の猿投窯産製品であろう。

9は備前焼播鉢の端部である。破片であるため口径・高さは不明である。胎土は長石を多く含む須恵質で、淡灰色である。粘土紐で成形し、その後粗いナデで仕上げる。口縁部端部外面に三角の凸帯を廻らす。注ぎ口は押さえて外へ外反させて作る。内面は櫛状の器具で粗い播目を付け、口縁部付近に横方向にも注ぎ口以外に廻らす。15世紀後半から16世紀前葉（IX～X期）と考えている。

瓦質土器（10・11） 10は瓦質円形火鉢である。口径30.6cm、高さ13.3cmで、浅鉢に分類できる。胎土はクリーム色で器表全面に炭素が吸着している。内面は横ナデで仕上げている。口縁上端は2.5cm程平坦で水平に作り、体部は外側に丸く膨らみ、端部付近で内湾する。器表外面は荒れているが、口縁上端の平坦部分に篋ミガキの痕跡が窺える。体部口縁部付近にスタンプによって押印されたと考えられる唐草文を廻らせ、2本の凸帯で文様部を挟んで廻らしている。体部底付近にも凸帯を廻らす。脚は手捏ねで成形し、なで付けて付着させているが、脚の数が3本であるのか4本であるのか不明である。スタンプを凸帯で区画された場所に捺印する火鉢が隆盛する15世紀代（IX期）であろう。

11は瓦質羽釜である。口径39cm、幅約4cmの先端がやや下向する鏝を胴部に廻らす。胎土はクリーム色で外面に炭素が吸着する。内面は横方向のハケメ調整である。鏝は付け根を横方向のなで付け、鏝下の胴部はオサエ、鏝上は横ナデで調整している。胴部が口縁部方向にやや外傾している。15世紀代（IX期）に想定している。

（3）瓦磚類（図19、図版4）

軒丸瓦（12） 12は小型の巴文軒丸瓦である。土師器1～4とほぼ同一箇所採取した。胎土は淡灰色、表面には炭素が吸着している。小片であるが鎌倉時代から室町時代の瓦であろう。

鬼瓦（13） 13は小型の鬼瓦である。文様は欠落しているが、沈線による区画線が篋によって引かれている。厚さは残存部で5.5cmで、裏面下方はなだらかに凹んでおり、そこに取っ手が付くものと思われる。胎土・焼成は12とほぼ同じで、側貼りを付け足す技法に至っていないので、鎌倉時代から室町時代にかけての鬼瓦であろう。

磚（14） 14は磚である。厚さ3.5cmを測る。胎土は白灰色で表面に炭素が吸着している。上面と側面は丁寧なナデで調整し、裏面は粗く離れ砂が付着している。特に上面は滑らかで歩行によって磨り減ったものと考えられる。

参考文献

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年所収。

檜内明博「臨川寺出土資料にみる中世後期陶磁器の様相」『太宰府陶磁器研究』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会、1995年所収。

中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会、1995年。

小林章男『鬼瓦』大蔵経済出版、1981年。『続鬼瓦』私家版、1991年。

5. まとめ

図21に示すように今回の調査で検出した2区土坑22は、この西壁肩より東方約115mで、1977年に京都市埋蔵文化財研究所が検出したSX01北東隅と直線で繋がる可能性がある。SX01は調査区南西隅から調査区西壁に沿って22m以上北に延び、北端で直角に西方へ曲がる。東肩と北肩はほぼ垂直に掘られ、深さ1.8mを測る。出土遺物から15世紀後半に埋まったと報告されている。西肩が調査区外となるため幅は不明であるが、推定溝状遺構とされている。南北に長い溝状遺構は真北に対し西に約20度ほど振れており、「嵐山高架橋」架設以前の明治24～35年に京都府が作成した「京都府寺誌稿 45 臨川寺」(京都府立総合資料館蔵)の「付図」に描かれた臨川寺境内の東縁に一致する(図20)。1969年調査の庭園は現在高架道路下に眠っており、1977年に高架道路東で検出した西に傾斜するSX01が、三合院庭園東端を限る溝である可能性が高い¹⁾。

今回の調査で検出した土坑22の特徴は、①L字の肩方向が西に振れており、SX01北端の西に折れ曲がった延長線上が、土坑22の北肩部に繋がる。②深さがSX01と同一の1.8mで、肩部がほぼ垂直に掘られている。③埋まった時期がSX01と同時期の15世紀後半である。④最下層に廃棄遺物群が無く、一部を除いて遺物が散発的に埋まった状態であり、一時的なゴミ処理の破棄土坑とは考えにくい。以上により、臨川寺「伽藍郭内」を区画する溝の可能性を考えたい。

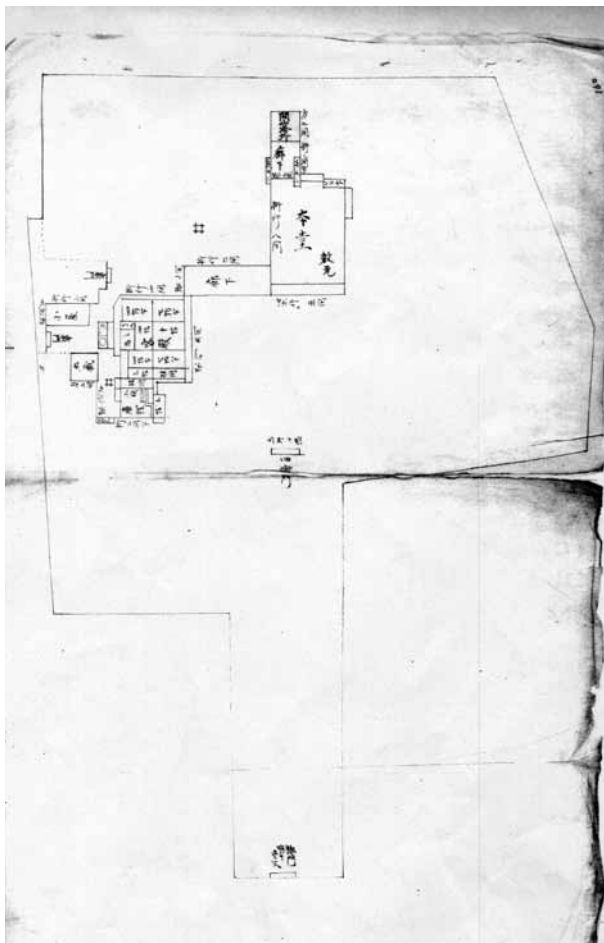


図20 臨川寺明治時代境内図(京都府立総合資料館蔵)

SX01北端と土坑22北端と繋ぐ推定線も、図8に描かれた「亀山殿」に至る東西方向のメインストリートで、図1で示した現存する「造道」の傾きとほぼ平行である。また、SX01の傾きも図1にあるように平安時代以来の南北方向のメインストリートである「朱雀大路」(出釈迦堂大路・現在の天龍寺前南北道)と平行で、臨川寺東を区画する瀬戸川ともほぼ平行である。土坑22は西端で南に折れ曲がる可能性が高く、位置関係からもSX01と土坑22は「臨川寺領大井郷界畔絵図」(図8)に描かれた臨川寺領内の伽藍北限北東隅と北西隅に該当すると考えることができる。このことによって、臨川寺「伽藍内郭」の傾きはややばらつきがあるが、平安時代前期以来の北が約16度西に傾く嵯峨庄条里に従っていることが、明らかになる。

今日までの研究によって「亀山殿近辺屋敷地指図」(図9)に描かれた亀山殿・川端殿な

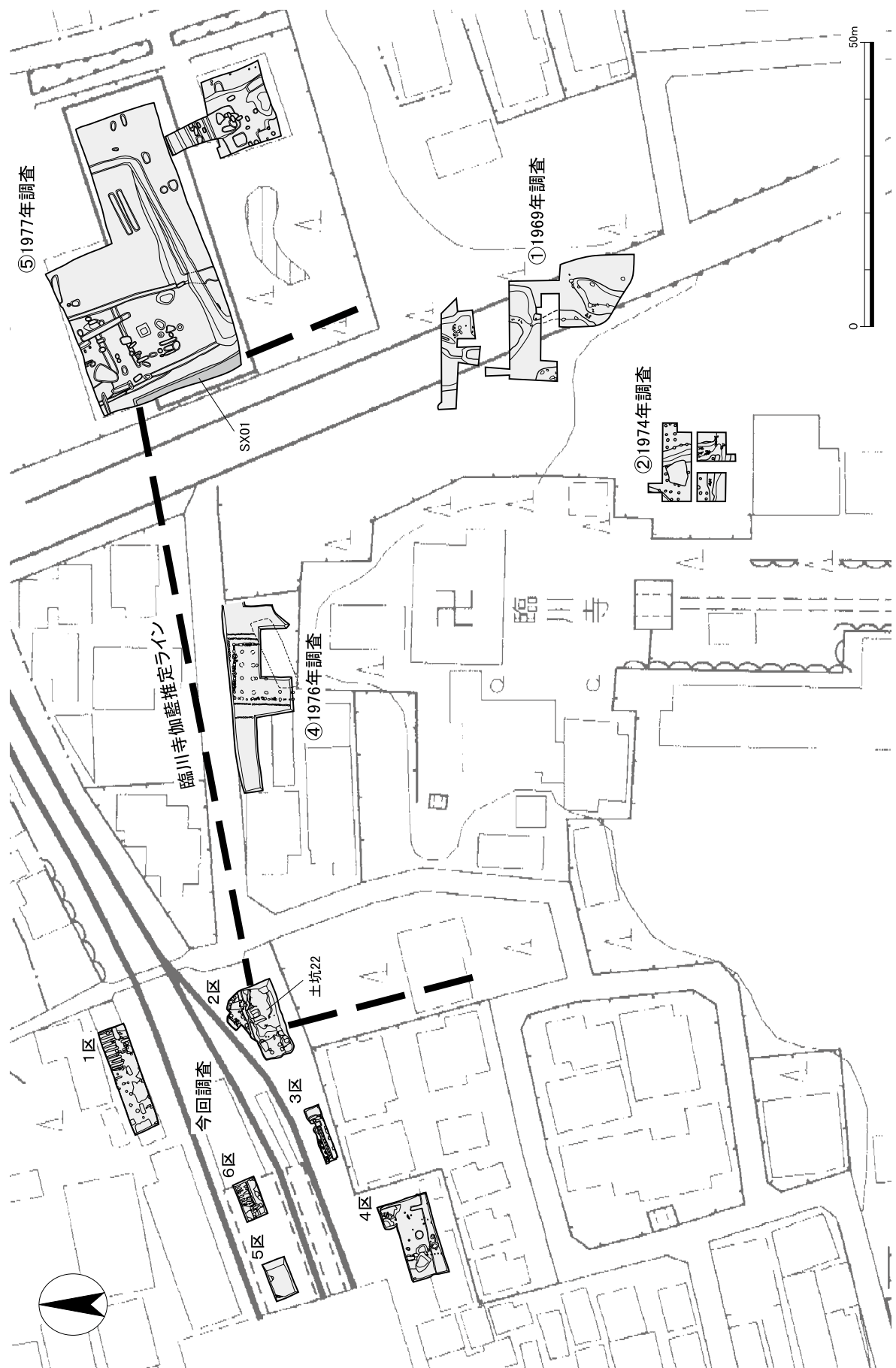


図21 臨川寺伽藍北限復元図 (1 : 1,000)

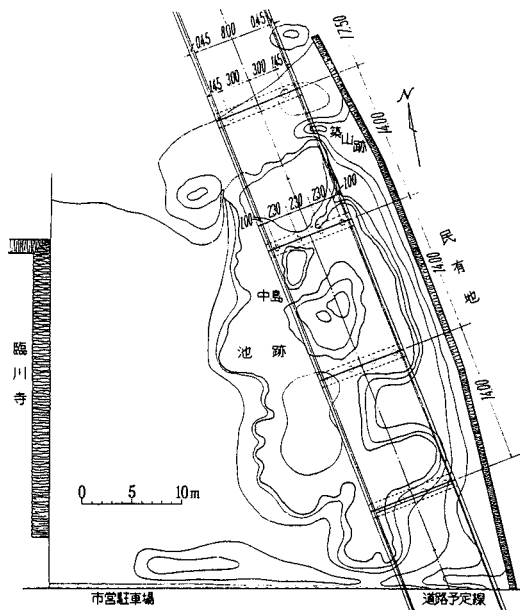


図22 臨川寺庭園遺跡と道路計画

どの地割は西に振れる嵯峨野条里に沿った配置で復元されている。今回の調査では1978年の「報告書²⁾」で「臨川寺付近の地割は、『嵯峨庄田図』から復元される条里地割を踏襲しており、寺の東・西・北を限る境界となった道や川も同じことがいえる。・・・この地が、皇室・女院と伝領され、やがて臨川寺寺地となったのであるから、条里地割と寺の四囲が一致しても不思議ではない。」とした推定を裏付ける調査となった。

現存する臨川寺の伽藍中軸線は正方位である。現在の臨川寺北限土堀北側の宅地開発に伴う発掘調査（1976年）で検出した建物跡も正方位で、瓦などの出土遺物から南北朝時代に建てられた建物跡と

されている。したがって、南面して正方位に並ぶ伽藍配置は臨川寺創建期から存在した可能性が高い。しかし、これらの正方位の禅宗伽藍建物に対して、寺域は条里を踏襲して西に振れていることが明らかになった。この建物跡と今回推定した臨川寺伽藍北限との間は微かに北に約7mであり、溝が東西に掘られていたとするならば、その幅は7m以内であろう。また、伽藍が正方位に整然と配置されるにもかかわらず、敷地は西に傾いているという矛盾は、夢窓の「工夫」によって伽藍東側に生じる直角三角形の空闲地を北東に築山を築いた「仮山水」にすることによって調和的に解決しようとしたのではないだろうか。

註

1) 図22は吉川 需「高架道路の建設と臨川寺庭園遺跡の保存」（文化庁文化財保護課監修『月刊文化財82号』第一法規出版株式会社、1970年所収）に掲載された図である。『臨川家訓』で「予於三合院東構仮山水」とされた場所に該当する。この「仮山水」は1969年の調査で明らかになったように池を伴うことから、枯山水庭園ではない（重森三鈴『枯山水』大八州出版、1946年）。しかし、創建当初に深さ1.8m以上の溝が伽藍を囲っていたとすれば、掛樋で高架する以外に庭池に水を流せないで、枯山水庭園であった可能性も出てくる。

この点に関しては、足利義政が寛正三年（1462）九月二十九日、三合院に御成した際に「御泉水東北友雲亭被御覧」（『蔭涼軒日録一』史籍刊行会、1953年）とあるように「泉水」であった可能性がある。しかし、寛政五年（1464）九月晦日に御成した時には「東辺亭閣上下御登覧」（『蔭涼軒日録一』前掲）とあり「泉水」の文字が消滅している。このことから、臨川寺が、応仁の乱以前から盛んであった徳政一揆からの防御のため、惣構を築いたと想定することも可能であり、SX001・土坑22の出土遺物の年代観とも矛盾しない。土坑22は図12に見られるように、途中に炭層等を挟んで徐々に埋まっていった過程を示しているため、溝が北に廻ればそのまま枯山水となる可能性がある。

しかし、応仁乱後の延徳三年（1491）七月八日条の『蔭涼軒日録三』（史籍刊行会、1954年）には三合

院に御成した將軍足利義植と筆者の亀泉集証との会話の中で庭園に流れる水について次のように述べている。

「愚白。東坊之泉水可有御一覽哉。御舍胡。愚前引透昭堂雨打之下。往東坊之旧跡。白公相曰。此地有坊号。東坊曾御成時者於。此坊御点心御斎有之。又此泉水者開山手御立之石也。樹皆乱中失之。今所在之樹者皆自然生也。御成友雲菴。愚白。此亭者開山御遊息地也。相公白。此水者自何出哉。不断有之乎。答白。自此山之後出。不断有之云々」

この会話が昔の思い出話でないならば「泉水」は水の流れを伴う庭のことであり、1966年の調査で検出した北東部築山跡の背後から水を引いていた可能性が高い。同じく夢窓が作庭した靈龜山天龍寺曹源池滝組も、明治時代までは龜山の湧泉から滝組東側の南北切り通しの園路上に掛樋を架けて水を引いていたことが、京都府による1959年調査（中根金作『京都の庭と風土』加島書店、1991年）で判明している。三会院庭園も溝が廻っていたとしても溝を掛樋で跨いで流した可能性がある。

この庭園遺構は当時調査団長であった岡崎文彬氏によって「検討のすえ陸橋が架せられたが、環境を損じたことは否めないとしても、なお将来の再発掘は可能な形になっている」（岡崎文彬「臨川寺旧境内発掘地に対する所見」『臨川寺庭園遺跡発掘調査概要』臨川寺庭園遺跡発掘調査団、1974年所収）とされており。吉川 需「高架道路の建設と臨川寺庭園遺跡の保存」（前掲）に、庭園調査に至る経過が記録されていることを付言しておく。

- 2) 吉川義彦・中村 敦・石井 望『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅳ、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1978年。

版 圖



1 1区全景（東から）



2 2区全景（西から）



1 3区全景（東から）



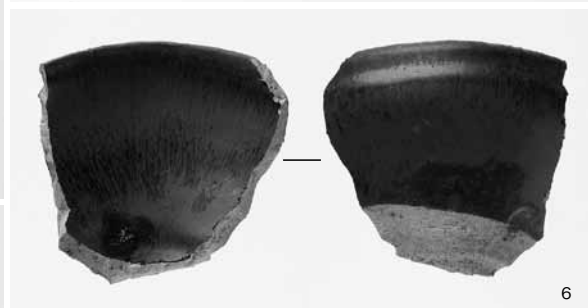
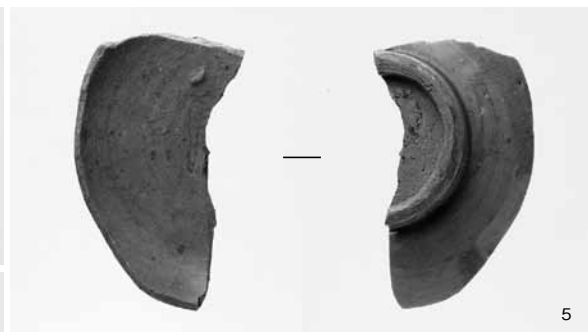
2 4区全景（北東から）



1 5区全景（西から）



2 6区全景（東から）



報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき・めいしょう あらしやま							
書名	史跡・名勝 嵐山							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-1							
編著者名	東 洋一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2012年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき・めいしょう 史跡・名勝 あらしやま 嵐山	きょうとしょうきょうく 京都市右京区 さがでんりゅうじ 嵯峨天龍寺 つくりみちちよう 造路町	26100	A809	35度 00分 55秒	135度 40分 42秒	2012年3月 14日～2012 年4月16日	360m ²	駅構内 リニューアル 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡・名勝 嵐山	史跡・ 名勝	中世	土坑	土師器、瓦質土器、焼 締陶器、施釉陶器、輸 入陶磁器、瓦、埴				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-1

史跡・名勝 嵐山

発行日 2012年7月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961